

昨年度（二〇一三年度）

の夏、日本私立大学連盟の
新任教員向けFD推進ワー
クショップに参加させてい
ただき、授業をどのように
して双方向的なものにして
いくかを考えるための、さ
まざまなアイデアを得るこ
とができた。ここでは、そ
の後のいくつかの応用を紹介
させていただきたい。

昨年度の演習形式の授業では、活発な意見のやりとりの場
がつかれないことが悩みだったので、今年度の演習では、（わ
れながら地味な工夫だと思うが）互いに全員の顔が見えるよ
うにコの字型に着席してもらい、毎回の授業でこちらから全
員を一度か二度ずつ指名し、発表者へのコメントを必ずもら
う、という形にした。これで、全員の受け身でその場にいる
という姿勢はなくなっていくと同時に、自分を「人見知り」
と感じている学生も、人前で発言することに少しずつ慣れて
いったように思う。

また、調べて資料やパワーポイントを作り、前に立って口
頭発表、という定形のスタイルだと、学生のモチベーション
が思うように高まらず、達成感も十分ではないように感じて

●私の授業実践——教育現場の最前線から

active learning

soy creative learning

福嶋 伸洋 ● 共立女子大学文芸学部専任講師



見つけ方、音声編集ソフトの使い方など、ごくごく基本的な
ことを教えるだけでも、学生たちは自主的に課題をこなし、
グループワークの楽しさもつらさも味わいながら、それぞれ
に達成感を得ていたと思う。

二年生の演習では、「詩の翻訳、歌の翻訳」をテーマにし
たが、さまざまな翻訳の仕方を読んで面白い、考える、とい
うやり方だと、どうしても受け身になってしまうため、實際
に歌える日本語の詞を作ってみるという活動を盛り込んでみ
た。これも、自分が最近やっている、ボサノバの詞を歌える
日本語の詞にするという仕事から思いついた。主に英語の曲
をとりあげたが、直訳はこちらで用意して外国語の壁はとり
払い、また各フレーズが何音節から成っているかを数えてあ
げて、翌週までにそれぞれが日本語の詞を作ってくる、とい

う形で行った。脱落しなかった学生たちは、毎週一曲とかなりきつい課題だったにもかかわらず、楽しんで作ってきたし、授業の中で、他の学生の作品の良いところを積極的に見つけ、指摘できるようになっていった。授業外でも、歌を聞いたときどんな意図でどんな言葉が選ばれているかを考えるようになった、という感想もあり、「作る」ことを通じて言葉への感度を高めることができたのではないかと思う。

このようなゼミのあり方は、active learning であると同時に、creative learning であるとも言えるのではないか。実際にやってみて、学生は「創る」活力を無尽蔵にもっているように感じられた。その力を存分に発揮してもらうには、演習では講義とは逆に、教員は最小限の必要な手助けをするだけで、あまりがんびりすぎないほうがいいのかもしれない。教員が担うのは、講義形式の授業では、大勢の乗客を乗せた飛行機のパイロットの役割だとすれば、演習形式の授業では、学生一人ひとりの乗るグライダーを空中に押し出してやるそれに近いようにも思っている。

また、一方通行になりがちな講義形式の授業では、双方向性を確保するにはどうしたらよいかと考えた。今年度は、毎授業後に二〇〇字ほどのコメントを提出してもらい、特に目を引いたものを、次の授業の冒頭で紹介する、しかも、スクリーンに映し出したコメントを、本人にマイクを持たせて読

み上げさせる、という方法をとった。

人前に出るのを恥ずかしがって「いいないふり」をしていた学生もいたようだったが、多くの学生は、恥ずかしさと誇らしさがないまぜになった感情を抱いて、教室に自分の声を響かせていたように思う。毎回、少しずつではあるが、授業でインプットした内容を自分の中で練り直してアウトプットする、というプロセスを経ることで、学生たち自身が、日々の学びを確かな手応えのあるものとして感じるようになったのではないかと思う。

また、このやり方だと、受講者が一〇〇人を超える講義の授業でも、特に光るものをもつ学生の名前を自然に覚えることができた。個人的には、教室という空間が、匿名の学生たちが居合わせているだけの場ではなく、それぞれが自分の存在を示し、また他人の存在を認める場であってほしい。他のディシプリンを究めようとしている方々の目には邪道と映るかもしれないが、「文芸学」は、the answer (正しい答え) がなくどんな答えも an answer (答えの案) にすぎない、という問いを多く発する学であると思う。そのような学問の枠組みの中で、正答のない問いに対して学生一人ひとりが自分なりに考え、自分の答えを提案してゆく、というやりとりは、当初予想していたよりずっと楽しく、クリエイティブな営みになったと感じている。

新潟のキリスト教学校の歩み

——その芽生え、消滅、復活

一 新潟のブラウン塾、キダー塾

敬和学園の第一の精神的な前身は、一八六九年一月に新潟に来た米国オランダ改革派のS・R・ブラウン宣教師夫妻とM・E・キダー宣教師の私塾にまでさかのぼる。ブラウンは、一八六九年一月から新潟・古町の不動院で開校した官立新潟英学校の英語の教師として英語を教えた。ブラウンの娘が新潟のイギリス領事のラウダーに嫁いでおり、新潟開港に続いて官立新潟英学校設立の話を聞いて、自分の父親を斡旋したことによる。ブラウンは、キリスト教の宣教師としてではなく、英語教師として夫人と同じ教会員のキダーを伴って新潟に着任した。

ブラウンは、翌年三月ごろから日曜日に自宅の宣教師館でバイブル・クラスを開いて希望者一二人に聖書を教え始め、同じところにキダーは、ブラウン夫人と共に平日に自宅の宣教師館で裁縫や家事などの女子教育を始めた。だがその当時は、まだキリシタン禁制の高

札が出されていた時代であったので、ブラウンは聖書を教えたかどで新潟英学校を解雇され、七月に夫人とキダーと共に横浜に戻った。

新潟英学校の生徒でバイブル・クラスに出ていた阿部欽次郎や真木重遠ら六人は、ブラウンを慕って横浜へ同行した。阿部欽次郎は、のちに新潟女学校と北越学館の創設に携わった。長岡出身の真木重遠は、ブラウンより洗礼を受け、新潟県人で最初のキリスト者となり、新潟・上田・青森などで教会設立に尽力した。新潟英学校でブラウンのもとで学んだ藤沢利喜太郎は、のちにベルリン大学やストラスブール大学で学んで理学博士となり、帰国して東京帝国大学で数学を教えた。横浜のブラウン塾は東京一致神学校を経て明治学院へ、横浜のキダー塾はフェリス女学院へと発展していった。

二 パームの医療宣教

エディンバラ医療宣教会から派遣されたパーム宣教

師は、一八七五年四月に新潟に来て、八年五カ月にわたって西大畑のパーム病院（現在の北方文化博物館新潟分館南隣、金井文化財館のところ）ほかで医療宣教にあたった。パームを助けた人々には、大和田清晴・虎太郎父子のような医師と押川方義と吉田亀太郎のような伝道者がいた。パーム病院は医療活動を行うばかりでなく、伝道者養成の神学塾のような側面も兼ねていた。パームが始めた「新潟公会」は、パームが新潟を去ったのちに、一致教会に加わった新潟日本基督教会（現・日本基督教団東中通教会）と新潟第一基督教会（現・日本基督教団新潟教会）に分かれたが、パームの医療宣教活動は新潟県のプロテスタントの諸教会の背骨を形成した。

押川方義と吉田亀太郎は、一八八〇年八月に起こった新潟大火をきっかけにして宮城県の石巻や仙台に転じ、日本のスコットランドとして東北各地に教会を建てていった。押川方義は一八八六年に仙台神学校と宮城女学校を創立したが、それらは東北学院と宮城学院へと発展していった。

三 新潟女学校・北越学館の開校と休校

敬和学園の第二の精神的な前身は、新潟女学校と北越学館である。パームが新潟を去ったのちにアメリカン・ボードがそれを引き継いだが、医療宣教から教育宣教に活動方針を転換させた。阿部欽次郎は工部女学校（東京大学工学部の前身）を中退して新潟に戻り、自分が建てた私立新潟英学校の生徒

も建物も新潟女学校と北越学館にささげた。

成瀬仁蔵は、一八八六年八月に新潟第一基督教会の初代牧師として赴任した。一八八七年五月二日には新潟箇所跡を仮校舎として、「婦女に固有する天賦の美性を発達せしめ、智徳兼備の良女善婦の養成」を目的とする新潟女学校を開校した。のちに本校舎は、南浜通二番町のパーム病院跡地に移った。新潟女学校では、毎朝三〇分間の礼拝から一日の授業が始まり、英語に力を入れた教育を行った。成瀬は二年間、新潟第一基督教会の牧師をして校長を兼務したのちに、牧師を辞して新潟女学校の校長に専念した。普通科目のほとんどは成瀬が教えたが、成瀬夫人とスカッター姉弟らがそれを支えた。成瀬はその後、アメリカ留学を経て帰国後に、梅花女学校校長を経て、日本女子大学（日本女子大学の前身）を創設した。

他方の男子校に関して、加藤勝弥が初代館長となり、寺裏通り一番町の旧私立新潟英学校を仮校舎として、一八八七年一〇月一五日にキリスト教主義教育と英語教育を柱として、「英語ヲ以ツテ高等普通学科ヲ教授スル」「生徒ハ凡テ毎朝七時三〇分ヨリ八時マデ公会（すなわち礼拝）ニ出席シ、道育（すなわち徳育）上ノ講話ヲ聴ク事ヲ要ス」という教育方針のもとで北越学館は開校した。のちに学校町二番町（現・県立新潟中央高校の場所）に本校舎と寄宿舎と食堂が建てられた。一八八八年九月には、空席だった教頭（すなわち校長）として、新潟襄の幹旋で新潟と同じくアーモスト大学を卒業

して帰国した内村鑑三が着任した。だが内村は、一二月には宣教師の宣教方針と対立して北越学館事件を引き起こし、辞任した。その後任として松村介石が二代目教頭となり、それは二年半続いた。

新潟女学校と北越学館は、一八八九年に大日本帝国憲法が發布され一八九〇年に教育勅語が制定され、自由民権運動が抑えられて下火になり、欧化主義から国粹主義に急転換していった試練の時期に、宣教師の転出や内部の政治的対立、地元の有力量者の離反などのさまざまな要因が絡んで、一八九三年四月に休校に追い込まれた。五年半の北越学館の教育からは、五泉出身の伝道者木村清松、五十公野出身の東北学院第三代院長出村悌三郎、上館出身のダンテ研究家山川丙三郎などの逸材を輩出した。彼らは、新潟から歩いて仙台に向かい東北学院に編入した。

さらに一八九九年、学校で宗教教育を禁じた文部省「訓令第一二号」が出された。この時期に全国で六七校あったミッション・スクールの中で二六校が合併・閉鎖に追い込まれた。この試練の経験から、一九一〇年に基督教教育同盟会（現・キリスト教学校教育同盟）が結成された。

四 大正デモクラシーの時代

大正デモクラシーの思潮のもとで、新潟教会の長田時行牧師が一九一九年一月に教会堂を仮校舎として聖友女学校を開

校し、一九二四年一〇月に東中通二番町に校舎を新築移転し、一九二七年五月に聖友高等女学校として拡充したが、昭和初めの軍国主義化の波に勝てず、一九三〇年四月に閉校した。

また、一九二二年から一九三〇年まで続いた木崎村（現・新潟市北区）の小作争議で、地主に反対して木崎・横井・笹山・早通の小学生約五〇〇人が同盟休校し、一九二六年には木崎に無産農民学校という農民小学校を開校したが、四カ月後に和解し閉校となった。だが、それは新潟高等農民学校として引き継がれ、一九二八年まで存続した。これはキリスト教学校ではなかったが、賀川豊彦が校長を務め、杉山元治郎、片山哲、井伊誠一らキリスト者も講師となって支援した。のちにそれは農民福音学校として展開していった。

五 敬和学園の発足・敬和学園高校の開校

五港から始まった日本のミッション・スクールの中で、新潟の学校はいずれも短命であった。しかし、明治・大正期のキリスト教学校の再開を願う祈りが重ねられていた。第二次世界大戦後にふたたび自由が回復され、日本国憲法や教育基本法により新しい日本が形成されていく中で、キリスト教学校を再興しようという熱意と祈願は、新潟の澤田義方や新発田の井伊誠一らに見られたが、まだ機は熟していなかった。

一九五六年にジョン・モス宣教師が新潟に着任したのちに、モス宣教師夫妻と東中通教会と新潟教会の牧師と有力信徒の

間で、キリスト教の教育機関の設置が検討された。一九六三年三月に泉谷重義らによって新潟朝教会が発足した折に、大阪女学院の西村次郎院長を迎えて、学校設立の祈りがささげられ、同年十一月に新潟キリスト教主義高等学校設立準備委員会が発足した。一九六七年一月には高等学校の校名を「敬和学園」とし、初代校長を日本聖書神学校教授の太田俊雄と決定した。「敬和」は「神を愛し、隣人を愛する」(マルコ福音書一二章)というイエスの教えに由来するが、太田俊雄は、それを日本的文脈で「神を敬い、隣人と和する」に置き換えた。

同年八月には新潟市から新潟開港一〇〇周年事業の一環として太夫浜の土地が提供され、ドイツ福音教会からの協力資金三五〇〇万円と北米諸教会から協力資金三六〇〇万円も送られてきて、国内の募金活動で二億円以上集め、日本基督教団の決議により発足し、法人は当初は明治学院の支援を受けた。

こうして敬和学園高校は、一九六八年四月に「敬神愛人」をモットーとして開校した。以来、キリスト教に基づく一人ひとりを大切にする人格教育、英語教育と国際的視野に立つ教育、労作教育と寮教育を柱として教育を展開している。

六 敬和学園大学の設立

太田俊雄は、高校創立時から「学園」構想を抱いていたが、

大学開設は当初は夢のような話であった。それが実現へと動き出したのは、敬和の教育に根ざした四年制大学のビジョンが共有されたことによる。一九八〇年に大学設立準備委員会が発足し、一九八六年一〇月の理事会・評議員会で、敬和学園大学設立が議決され、大学設立準備委員会が発足した。

高校創立二〇周年を迎えた一九八七年六月に大学設立準備室が開設され、設立認可に向けたカリキュラム編成や教員組織編成などの準備作業が進められ、募金活動が始められた。一回目の申請が受理されず、陣容を入れ替えて一九八九年一月に第五代理事長として後宮俊夫牧師(元日本基督教団総会議長)が就任し、同年二月に学長予定者として北垣宗治同志社大学文学部教授が就任した。大学設立準備室は人員を補強して基金の募金を集めたが、大学創設費の約二六億四〇〇〇万円のうち、新発田市から約一二億円、聖籠町から約四億五〇〇〇万円、新潟県から六億円の支援を受けて大学が発足した。

教育理念として「真理は人間を自由にする」(ヨハネ福音書八・三二)というリベラル・アーツ教育の精神に基づき「福音主義キリスト教の精神に基づく自由かつ敬虔な学風の中で真理を探究するとともに心の教育を実践し、国際的教養豊かな良心的人材を養成することを目的とする」(学則第一条)を掲げ、英語英米文学科と国際文化学科の二学科(入学定員各一〇〇人)で構成された人文学部の単科大学として開学した。

七 大学教育の基盤形成

北垣宗治学長時代（一九九一～二〇〇二年度）に、敬和学園高校の「労作」を「ボランティア」として継承し、キリスト教主義教育の三つの柱として一年生全員に出席を求める「キリスト教学」「チャペル・アセンブリ・アワー」「ボランティア論」を定めた。一九九三年に全国で初めてボランティア主事（現コーディネーター）を置き、一九九八年に学内にボランティア・センターを設置した。ロソフスキー教授のリベラル・アーツ教育論に基づくカリキュラム・ポリシーを導入し、キリスト教主義リベラル・アーツ教育の土台を築いた。二〇〇二年には教育実践に基づき教育理念を現代化して「キリスト教主義に基づく自由かつ敬虔な学風の中でリベラル・アーツ教育を行い、グローバルな視点で考え、対話とコミュニケーションとボランティア精神を重んじ、隣人に仕える国際的教養人を育成します」というミッション・ステートメントを定めた。こうして、「キリスト教主義」による人間教育、「国際主義」と「地域主義」による専門教育という三つの教育理念を明確にした。また、各種のインターンシップを始め、共同研究の場として人文社会科学研究所を開設した。その間、日本私立大学連盟「私立大学の自己点検・評価に向けて」に基づいて一九九四・九五年度、一九九八・九九年度に自己点検・評価を行い、二〇〇二年度に大学基準協会方式

で自己点検・評価し、翌年に大学基準協会に加盟した。

北垣学長は「大学のある街づくり」にも力を入れ、地元の新発田市長・市議会議員、聖籠町長・町議会議員、新発田ロータリークラブ会員をノースウエスタン大学のオレンジ市をはじめ、ハーバード大学、セント・アンドルーズ大学にも引率した。そこから地元の大学支援団体オレンジ会が誕生し、新発田市とオレンジ市は姉妹都市協定を結んだ。

八 大学教育の地域貢献

新井明学長時代（二〇〇三～二〇〇八年度）には、定員割れに対する対策として、二〇〇四年に従来の二学科を改組転換、地域社会のニーズに対応して福祉系の共生社会学科（入学定員四〇人）を立ち上げ、英語英米文学科を英語文化コミュニケーション学科に名称変更して、大幅なカリキュラム改革を行った。ポイント制教員人事制度、サバティカル制度、TA制度、学長補佐制度の新設、常勤教職員が全員参加する学長選考制度改革などを次々と行った。また、学外との連携強化を中心にして、以下の三点に力を入れて改革した。

第一に、同一法人の敬和学園高校との連携を深め、高大の共通の理念形成に力を入れた。県内の県立・私立高校とは、教員の高校訪問を出前講義に改め、高校訪問は入試課の職員が専従することにした。

第二に、新しい学生層の獲得に力を注ぎ、留学生の学費を

一律四割カットして学びやすくし、五五歳以上のシニア入試制度やバドミントン、アーチェリーなどを強化してスポーツ推薦入試制度を導入した。

第三に、二〇〇六年に新発田商工会議所・新発田市・本学の産官学共同プロジェクトで商店街の空き店舗を改装して地域活性化を目指して「新発田学研究センター」を開設し、二〇〇八年に空き店舗を改装して学生と市民で運営する「まちカフェ・りんく」を開設した。さらに、地域の魅力再発見のために小説・随筆・児童文学の文学賞「阿賀北ロマン賞」を設置し、「新発田朝市十二歳市」を復活させた。また、同年にボランティア・実習施設を兼ねて社会福祉法人シャローームと共同して学内に「グループホーム富塚・のぞみの里」を開設した。

これらの地域社会との連携に基づいて二〇〇八年に、PDC Aサイクルの中長期計画ビジョン「隣人に仕えるための地域社会への貢献として、少子高齢化と地域格差の進む時代に、持続可能な社会の担い手を育成する」を定めた。

九 地域再生・大学再生の新しい大学教育

鈴木佳秀学長時代（二〇〇九～二〇一四年度）には、地域社会でさまざまなフィールド型アクティブ・ラーニングが展開されている。それらは、新発田学研究センターやまちカフェ・りんくの活動のほかに、国際インストラクター事業、留

学生国際交流理解教育、外国籍児童日本語教育支援プログラム、被災地支援「敬和ホープ」、福祉施設入居者との「ふれあいバラエティ」、長期入院児童支援「サンタ・プロジェクト」、デジタル通信・FM放送の地域情報発信活動「敬和ランチ」「敬和スタグラム」などである。二〇一三年度から地域社会の行政や企業のトップが講義し、翌週は現場を实地見学するオレンジ会提供の「地域学」が始まった。

二〇一五年度からは、地域貢献の担い手を育てる地域再生・大学再生の新たな教育プログラムが始まる。それは学科を横断した副専攻的な「地域経営プログラム」である。一年生全員が履修する「地域学入門」、カリキュラム本体の関連科目群の学びを一定の単位数以上履修を前提にして各種のアクティブ・ラーニングを単位化する二・三年生科目「アクティブ・ラーニング演習」、三年生科目の六週間インターンシップ（組み合わせれば三カ月も可能）、問題解決学習（PBL）を目指した四年生科目「地域学研究」で構成されている。関連科目群を含めて三〇単位以上履修すると、「ディプロマ」が出され卒業式で表彰される。このプログラムを中心として、地域に貢献する学生が、地域社会に定着していく仕組みとして、新発田市の駅前複合施設整備計画で、新発田市の新図書館に隣接して、市と大学が協働で「街づくり」を進める象徴として、大学寮を建設していく。

こうして、経験による気づきと学びをフィードバックさせて「実践するリベラル・アーツ教育」を展開していく。

地域が学生を育て、

学生が地域を元気に

—名古屋学院大学×日比野商店街の事例より

水野 晶夫 ●名古屋学院大学経済学部教授

●商学連携の成果

名古屋学院大学名古屋キャンパスが二〇〇七年市内熱田区に開設され、それに伴い大学による地域連携活動が本格的に始まった。特に、地元日比野商店街とさまざまな活性化事業が行われ、商店街組合員数の倍増などの成果が得られた。その結果、日比野商店街は、二〇一〇年には「愛知県活性化モデル商店街」に認定され、二〇一三年三月に発刊された全国商店街振興組合連合会『商店街の可能性を目指して』の中で「一の活性商店街事例のうち『商学連携』のモデル事例として紹介された。そして二〇一四年には、経済産業省「がんばる商店街三〇選」にも選ばれた。

一方、こうした成果を実績に、大学は、二〇〇七年度には文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」、二〇一三年度には「地（知）の拠点整備事業（大学COE事業）」の採択を受けた。

マイルポストで毎月開催されている
「日比野商店街活性化会議」



●名古屋学院大学の地域連携活動における組織体制
商店街活性化を生み出す力は、大学内の以下の三つの組織の相乗効果によってもたらされている。

- (1) まちづくりサークルが運営するコミュニティカフェ

「マイルポスト」

商店街活性化の中核を担うのが、名古屋キャンパス日比野学舎一階にある「カフェ&ベーカリー マイルポスト」。まちづくりサークルに所属する三〇名強の学生たちが経営するカフェである。二〇〇二年に愛知県瀬戸市の商店街で生まれ、名古屋キャンパス開設に伴い、日比野商店街にて再オープンした。このサークルは、商店街活性化・まちづくりを目的に運営されており、普段は「マイルポスト」を学食兼コミュニティカフェとして営業しているが、地域連携事業などを企画・実践する「ことおこし」の拠点としても位置づけられている。二〇〇八年より月一回ペースでマイルポストにて

開催されている「日比野商店街活性化会議」は、商店街関係者はもちろん、学生や教職員、行政職員、地域NPOから構成されており、その中から数多くの活性化事業が生まれてきた。また、この会議の記録係は毎回学生が担当しており、P D C Aサイクルでの点検評価も行っている。

(2) プロジェクト型授業で運営する

「名古屋学院大学みつばちプロジェクト」

二〇一〇年より名古屋キャンパス白鳥学舎の屋上での養蜂、いわゆる「都市養蜂」を行っているのが「名古屋学院大学みつばちプロジェクト」。母体は経済学部プロジェクト型授業の受講生約二〇名である。

キャンパスに隣接する日本庭園「白鳥庭園」にて、はちみつを試食&販売会やトークライブを行ったり、地域の子どもたちをキャンパスに招待して、みつばちを題材とした環境教育イベントを開催するなど、現在では一〇を超える連携事業を展開している。また、採れたはちみつが商店街八店舗にてそれぞれのオリジナル商品として販売されるなど、数百万円にも上る経済効果を商店街にもたらしている。

さらに、他の商店街や教育機関向けに、都市養蜂の技術やイベントノウハウの提供も行っている。

(3) 大学・学生のまちづくり活動をサポートする地域連携センター

ター

名古屋学院大学地域連携センターは二〇〇七年に設立され、大学・学生が行う地域連携活動をサポートしてきた。二〇〇

七年一〇月には、本学と名古屋市との地域連携協定が結ばれ、商店街活性化活動をその中心の一つに位置づけている。

また、地元の熱田区役所との地域プラットフォームも構築し、商店街と一緒にまちづくり活動を実践する地域NPOの育成講座などの企画運営も行っている。

●「地域が学生を育て、学生が地域を元気にする」商学連携活動

大学の商学連携活動は、その活動を通じて学生が実践力を育むとともに、地域を活性化させることが期待されている。

現実の社会では、あらかじめ答えが用意されているわけではなく、自分たちで答えを探していかなければならない。調査や分析、教職員や地域の方々からのアドバイスなどを受け、試行錯誤しながら、学生たちは問題解決に取り組む。そのプロセスや成功体験を通じて、実践力を向上させるのである。

他方、学生たちのバイタリティや感性は、地域になかった新しい力となつて、問題解決とともに活性化に大きく貢献することもある。ともすると、地域は予定調和的な停滞傾向に陥り、活力を失う方向に進みがちになる。その中で、若い世代が新しいアイデアで、地域課題に取り組む姿勢が、その停滞傾向を打破し、地域の大人たちへのエンパワーメントにもつながるのである。

地域連携センターは、地域とのつなぎ役となり、学生たちに寄り添い、実践力向上や地域活性化をアシストする重要な役割を担っている。

学生の「第二の地元」と 地元の「御用聞き」

鎌苅 宏司 ●大阪学院大学経済学部教授・地域連携室代表

「すまんけど、絵馬描いてくれへんか」

電話の主は「日本一長い商店街」として知られる天神橋筋商店街の土居年樹天神橋筋商店連合会会長。二〇一二年一月半ばのことだった。

それまでの四年間、他大学のゼミがこの絵馬を描いていたが、ゼミの先生が退職され、描き手がいなくなったためだ。

「うち（の学生）に任せてください」

締め切りは一月二三日と、すでに一カ月を切っていたが、二つ返事でお受けした。地元の要望とあらば、何としてでもかなえたかった。

大阪府吹田市岸部に位置する大阪学院大学は、七学部八学科と短期大学部、大学院五研究科を擁する総合大学であるが、母体でありグループ校の関西経理専門学校が天神橋筋二丁目に所在することから、天神橋筋は本学発祥の地なのである。

この絵馬とは、天神橋筋商店連合会が同商店街の繁昌と大阪天満宮の発展を祈念し、縦一・五メートル×横二・二メー

天神橋筋商店街の絵馬



トルの巨大な板の両面に干支と願いを描き商店街に掲げるもので、「大型絵馬」としてすでに四年の実績があった。

われわれは、これまで制作された絵馬に負けない作品を五枚仕上げなくてはならなかった。

絵馬のお披露

目を約三週間後に控え、本学地域連携室では、学生への告知とガイダンス、下絵提出と審査依頼、そしてプレスリリースを行った。応募学生には、天神橋筋商店街と大阪天満宮の歴史、大型絵馬制作のいきさつ、本学と天神橋筋商店街との関係を説明した。幸い、文化会クラブであるフリーアート部からの参加も得て、応募総数は二八点に上り、その中から優秀作品五点が選ばれた。彼らは残り一週間を切る中で本制作に

とりかかり、絵馬を完成させた。その後、大型絵馬の制作は本学学生の活動として続いている。

参加学生には、ここ天神橋筋商店街を「第二の地元」としてとらえ、課題を考えてほしいと伝えていた。この「第二の地元」の考え方は、二〇〇八年春に本学に設立された地域連携室の学生向け社会貢献活動の底流をなしている。

キャンパスのある吹田では「学院大の学生さん」と認知されているが、当時、学生たちの地元意識は薄かった。そこで、大学のある吹田を「第二の地元」ととらえ、地元吹田や本学発祥の天神橋筋に興味をもってもらうさまざまな仕掛けを講じてきた。

その一つが、昨年七回目を迎えた「吹田くawaii祭り」である。これは、地元農家で吹田市農業振興研究協議会会長である平野紘一氏の、吹田に昔からある伝統野菜「吹田くawaii」を、地元の人知ってもらい、食べてもらいたいという思いを、本学が形にした祭りである。吹田を学生の「第二の地元」とする仕組みに加え、吹田のニーズに耳を傾けた地元の「御用聞き」の結果でもあった。

実は、同じことを天神橋筋商店街でも行っている。

二〇一四年三月、大阪天満宮表参道である天神橋筋商店街に、さらなるにぎわいをもたらすよう、本学学生とグループ校のASTカレッジ（関西経理専門学校、関西健康・製菓専門学校、関西医科専門学校）の学生が共同製作したオリジナル梅スイーツ「梅天らすく」を大阪天満宮に奉納し、好評を

梅天らすく



博したのだ。

今年、天神橋筋商店街で行う地域連携室の企画は、大学コンソーシアム大阪夏期インターンシッププログラム、プロジェクト型インターンシップ「大阪キタ天神橋筋商店街 実践観光まちづくりプロジェクト」である。

これは、日本三大祭りの一つ「天神祭」と、今年で三回目を迎える「天神天満阿波おどり」の二つの夏祭りを裏方から観察し、プロジェクト参加者の得意分野を生かした、斬新で集客力のある企画を提案する、課題・問題解決型のプロジェクトである。全加盟大学の学部一年生から大学院生まで参加可能であり、自信を形にしたい学生にはうってつけの企画だ。

「第二の地元」での学びは、学生が座学で学べない教育や気づきを得るチャンスであり、地元にとっても大学資源を活用できる絶好の機会である。大学の幸福とは、社会と向き合い、その要請に真摯に応えることで育まれると考えている。

巣鴨を潤いと 夢のある街に

柏木 正博 ●大正大学理事・事務局長

現在、文部科学省では、大学に対して「機能別分化」のより一層の推進を求めようとしている。その趣旨は、各大学の個性と特色をより明解にし、それに基づく教育及び研究の充実によって実績を上げ、社会的責任を果たすよう求めているものと考えらる。

この「機能別分化」策は、二〇〇五年に中央教育審議会（将来像答申）で提言され、二〇一三年六月には政府の第二期教育振興基本計画の中にも基本施策として挙げられている。

これに対応して本学では、二〇〇九年三月に策定した「中期マスタープラン」の重点施策において「社会貢献・地域連携」を大学運営の第三のミッションとして位置づけた。その実現のために、建学の理念（大乘仏教精神による「智慧と慈悲の実践」）を基盤に、「理論と実践の融合」による社会貢献・

地域連携に関する教育研究活動を推進していくことを宣言した。さらに、このマスタープランに基づく具体的施策を実施するために、二〇一二年四月に地域との連携、協働事業を一元的に管理・推進する組織「鴨台プロジェクトセンター」を開設した。その結果、教職員と学生が地域の人々と交流していくための施策構築と具体的な教育活動のマネジメントや支援を行っている。

また地域との連携については、本学が東京都豊島区西巣鴨に立地していることから二〇一四年三月、豊島区との包括協定（としま共創事業）を締結し、特に地元巣鴨の新しい「まち文化」創造を目標としてスタートした。

大学の地元である巣鴨には、東西を結ぶ旧中山道が横断し、江戸六地藏尊の眞性寺やとげぬき地藏尊の高岩寺が並び、都電が停留する庚申塚を経て、西巣鴨の大正大学に至る。この約一・八キロメートルの間には、巣鴨駅前商店街・巣鴨地藏通り商店街・庚申塚商栄会の三つの商店街がある。巣鴨の街道は寺社が混在し、「いのりと信仰のまち」が基盤となって商店街が形成された街でもある。

二〇一三年五月、街道に面する大正大学キャンパス南門に仏教文化施設「すがも鴨台観音堂（通称・鴨台さんえん堂）」を建立した。この施設は、かねてから地元の人々の懇請もあ



って、本学が長年考え抜いてきたプランの結実とも言えるものであり、本学の地域連携推進事業の象徴として街のシンボルとなりつつある。また、鴨台さざえ堂隣の五号館最上階には、洋食レストラン「鴨台食堂」をオープンし、近隣の方々のみならず、巣鴨の街めぐりに来た方々にも利用してもらおうなど、地域に開放されたコミュニケーション施設として喜ばれている。

こうした活動を契機として本学がリーダーシップをとり、

「おばあちゃんの原宿」と全国的な人気を博する「巣鴨地藏通り」に「巣鴨駅前通り」「庚申塚通り」を加え、巣鴨地域が一体となった。今後は、新たなビジョンに基づく「まち活性化」のテーマをもつ一本のストリートを生み出すことを目指していく。

本学がこのまちの「未来づくり」に全学体制で参画することによって、「大学は巣鴨の人々のもの」「巣鴨は正大学のキャンパスである」と宣言させていただき、大学施設などを地域に開放する一方、学生はもつと街に出ていつて世代や業種を超えた交流の場を広げ、巣鴨に多世代が集う新しい文化を育てていきたいと考えている。これは、鴨台プロジェクトセンターが推進する「すがも花街道プロジェクト」の大きなビジョンでもある。

かくして二〇一三年、それまで巣鴨地藏通りで行われていた「すがも中山道菊まつり」に本学も加わり、学生たちも参画することによって、鴨台さざえ堂の広場を活用して、中山道を菊で彩った「花街道」にすることができた。

こうした活動を推進して、大学と地域の一体感が増す中で、豊島区の理解と支援によって二〇一四年一〇月、巣鴨中山道の三商店街と大学の四者による一般社団法人「コンソーシアムすがも花街道」が設立された。これは、それぞれの商店街独自の活動を尊重しながらも、年中行事やイベント、まち活性化の活動を行うにあたっては地域住民を含めたオール巣鴨で考え、行動していこうとする画期的な取り組みとなる。

小規模とはいえ本学と豊島区との共創事業に関する協定が結ばれたことによって、大学と商店街・地元住民との協働によるまちづくり体制が整った。この「官・商・民・学」連携が、巣鴨の新たな未来を切り開くものと確信している。